

学校事故対応のあり方について

大川小学校事故遺族

鈴木 典行 佐藤 敏郎
紫桃 隆洋 只野 英昭

1 学校・教育委員会の不誠実な対応

- 学校管理下での大事故なのに、重く受けとめない。
- 明らかにごまかしているのに、お咎めなし。何事もなかったかのように人事異動、担当者交代、対話拒否（現在も続いている）

学校，教育委員会は信頼されなければならない。

- ・学校管理下での事故であることをふまえ，責任を明らかにして対応する。
- ・嘘をつかず，正直に事実を明らかにすること。（今すぐに）
- ・今後，閉鎖的，慣例主義的な姿勢を改める。

2 検証委員会の迷走

- 2年過ぎてからドタバタと立ち上がった。設置の経緯，委員の選出にも疑問が残る。
- 検証委員会がバラバラでチームになっていなかった。検証の進め方があまりに稚拙，コーディネーター的な役割をする立場が不在だった。

事実解明を放棄しない。本気で取り組む。

- ・知識と手法を備えた委員が権限をもって検証を行う仕組みを作る。
- ・にわか仕立てではなく，学校事故に対処する専門機関を常設する。あるいは，進め方をコーディネートする機関を常設する。
- ・委員会，及び事務局に血縁関係者を選ぶことは避ける。
- ・大川小学校事故の検証はしかるべき機関を設け，継続する。

3 子どもが見えなくなる教育現場

- 不十分な事後対応は，教師が本来担うべき役割を果たせない環境を作ってしまう。いざというときに子どもが見えず，手を差し伸べられない。
- 事態の改善につながらない形式的な通達，調査が多い。

教師が子どもとしっかり向き合う環境を作る

- ・人事，仕事の精選，学校経営，資質向上について抜本的に見直す。
- ・今回の有識者会議は形式的な通達で済ませない。

4 大川小を置き去りにする状況

- 大川小のことがタブー視され，目を背けてしまう状況になっていて，正しく認識されていない。
- 残された遺族，子ども達の思いを受けとめる体制ができていない。

本質を避けない，タブー視しない。

- ・事実に向き合うことをサポートする（被害者も，学校も）
- ・大川で生まれ，大川小に通ったことを誇りに思える未来をめざす。

安全なはずの学校で我が子を失った上、理不尽な事後対応によって遺族が受けたダメージは計り知れません。それが事実の究明の障害にもなっており、その状況は未だに改善されていません。遺族が声を上げないと（上げてても）、曖昧なまま収束させようとする力が働きます。けっしてあってはならないことです。

各地の学校事故事件でも、同じ構図で遺族が苦しんでいることが分かりました。課題を共有し、二度と繰り返さないための方策を探りたいと考えています。

1 学校・教育委員会の不誠実な対応

救える条件（時間・情報・手段）があったことは明らかで、十分に守れた命である。大川小学校だけが、どうして動かなかったのか。その理由を明らかにし、反省できなければ、学校に安心して子どもを通わせることはできない。

■学校管理下での大事故なのに、重く受けとめない。

安全であるはずの学校管理下で11人の教師が一緒にいながら、70数名を守れなかった。校庭にいた9割以上の子どもが犠牲になっている。重い重い事実である。

市・市教委のこれまでの対応は、そのことに正面から向き合っているとは言えない。「重く受け止めている」という市教委の先生方の言葉のなんと軽いことか。市長は大川小学校の事故を「自然災害の宿命」と言い放った。説明会等の案内は必ず「遺族の要望により開催」と書いてある。「市の責任において開催」と書くべき。

■明らかにごまかしているのに、お咎めなし。何事もなかったかのように人事異動、担当者交代、対話拒否（現在も続いている）

市教委は、震災後1ヶ月後の4月9日に行われた第1回目の説明会で「地震でバキバキと木が倒れてきて山に避難できなかった」と説明。ところが木は一本も倒れていない。その2ヶ月後の説明会では「木が倒れたように見えた」と説明を変え、質問が残っているのにも関わらず「時間だから」と一方的に打ち切り、説明会はもうやらないと宣言し、取材には「遺族は納得した」と答えた。「これぐらいで済ませよう」とした初期対応が、問題のほとんどすべて。特に、6月4日までに市教委がやったことは徹底的に検証しなければならない。

市教委は、学校管理下で多くの子どもと教師の命が犠牲になったというのに、あれほどデタラメに対応をした。A教諭が送ってきたとして、7ヶ月後に突然出してきたFAXの手紙の存在も、信じるという方が無理。その他、二転三転する説明や、資料の廃棄など数え切れない（詳しくは資料参照）。

担当者の二人は震災後1年で転出、当時、聞き取り調査にあたった方は2年で全員いなくなった。みんな、肝心なことは口をつぐんだまま、教育委員会から出て昇進。毎年「子どものためではない」と思われる人事が多数見受けられる。

この国では、あんなに明らかな嘘やごまかしを、4年半もかけて指摘できない。必死の思いで話した子どもの証言を抹消するなどということがまかり通っている。

また、こうした対応が今回の場合、せつかく生き残ってくれた先生をも苦しめ続けている。あの中で生かされた人には役割があるはず。

学校、教育委員会は信頼されなければならない。

- ・学校管理下での事故であることをふまえ、責任を明らかにして対応する。
- ・嘘をつかず、正直に事実を明らかにすること。（今すぐに）
- ・今後、閉鎖的、慣例主義的な姿勢を改める。

2 検証委員会の迷走

市教委では、事実を認めなかったり、曖昧にしたりという状態が続いてきた。それを打開するはずだった検証委員会は、途中で事実の解明を放棄し、ほとんど成果をあげること

ができずに終了した。このような検証委員会は二度と設置してはならない。

■ 2年過ぎてからドタバタと立ち上がった。設置の経緯，委員の選出にも疑問。

検証委員会が設置された経緯をたどると，不十分な結果になることは明らかだった。平成24年3月に，遺族と市教委が話し合いをしていこうと方向性を決めたにも関わらず，6月，市は検証委員会の立ち上げを突然市議会に提出。裏切り行為と言ってもいいほど。

話し合いの度に，次々に明らかになる事実。それは市教委が隠そうとしていた事実，つまり，市にとっては都合の悪い事実だった。話し合いの中に方向性を見つけようとする我々に対し，市は，これ以上話し合いを続けられたらたまらない，という状態だった。

私たちが話し合いをしようとしたのは，事実の究明はもちろん，大川小の事故について，みんなで知恵を出し合い，力を合わせていくという関係性づくりのためでもあった。いつまでも遺族対市教委ではなくて，真ん中に子どもの命を置いて，様々な角度から意見を出し合おう，最初は文句を言われるかもしれないが，その声に丁寧に向き合ってほしいと何度も呼びかけた。よく「遺族と市の溝埋まらず」と報道されたが，「溝」を埋めたいと願っていたのである。

そうした中，文科省主導で立ち上がった大川小学校事故検証委員会は，設置の目的や検証の手法，委員会の権限などが曖昧で，事務局と委員が親子であったり（「たまたま親子だった」というあり得ない説明），学校関係者がいなかったり，委員の人選も首をかしげるような状態だった。後で考えれば，責任の所在を曖昧にしたまま，収束させようとした行政側の意図をくんで書かれたシナリオだと分かるが，遺族はそこまでは気づけなかった。

■ 検証委員会がバラバラでチームになっていなかった。検証の進め方があまりに稚拙，コーディネーター的な役割をする立場が不在だった。

守れたはずの命を守れなかったという事実は動かない。だから，なぜそうなったのかを考えていくのが，本来，求められている検証である。検証委員会で盛んにこだわっていた「津波の挙動」は論点ではないし，その考察すら間違っていた。学校管理下の事故なのに，学校について語る委員がいないのは致命的だった。

事務局と委員が親子だったが，明らかに弊害になっており，やはり血縁関係者は避けるべき。後半は体調不良などで欠席をする委員も多く，委員会の体をなしていなかった。（出席半数以下のことも！）

その上，二年間で積み上げたものを「ゼロベースで」調べ直すといったものの，地形は変化し，証言は曖昧になる，むしろ「マイナス」からのスタートとなった。一方で，市教委は「検証中」という理由で遺族との対話を拒み続けた。

検証委員会が始まる前の24年10月に，私たちは，検証すべきのポイントとして「意思決定が遅かったこと」「川に向かって避難したこと」の二点を示した。その後，検証委員会が1年間，時間と金を費やして出した最終報告では，事故の原因は「意思決定が遅れたこと」「川に向かって避難したこと」とし，なぜそうなったのかは「明らかにできなかった」とされた。まったく進んでいない。（資料参照）

今回の検証については，遺族はもちろん，一般的に見ても，さらに言えば検証委員自身も不十分と考えている。再発防止を本気でめざすのであれば，しかるべき機関で検証を継続すべきである。

事実解明を放棄しない。本気で取り組む。

- ・ 知識と手法を備えた委員が権限をもって検証を行う仕組みを作る。
- ・ にわか仕立てではなく，学校事故に対処する専門機関を常設する。あるいは，進め方をコーディネートする機関を常設する。
- ・ 委員会，及び事務局に血縁関係者を選ぶことは避ける。
- ・ 大川小学校事故の検証はしかるべき機関を設け，継続する。

3 子どもが見えなくなる教育現場

学校や教育行政が変われば、失われずにすんだ命が多くある。遺族がこれほど苦しむ必要もない。検証報告書にもあるように、あの日の大川小学校は残念ながら「命を最優先にする組織」として機能しなかった。各地で起きている学校事件事故にも、同じような構図が見られる。教育現場は変わらなければならない。

■不十分な事後対応が、教師が本来担うべき役割を果たせない環境を作ってしまう。いざと言うときに子どもが見えず、手を差し伸べられない。

問題が発生し、その対応に追われ、また余裕がなくなるという悪循環をどうすることも出来ずにいる学校がたくさんある。50分間動けなかった校庭と同じ。

全国的に、いろんな不祥事もあり、学校教育のあり方、姿勢が疑問視され、教育現場は信頼を失っている。この際、膿を出してしまふべきである。

■事態の改善につながらない形式的な通達、調査が多い。

何か問題が起きると、文科省や教育委員会からいろんな通達が出されるが、それらを十分読み解いて、実践に生かしている学校がどれほどあるだろうか。目に見える、改善、変革を世の中に示し、定着させることが必要だと考える。

大川小の事例は、多くの人が注目している。学校のあり方を見直すのだという姿勢を示す絶好の機会である。

教師が子どもとしっかり向き合う環境を作る

- ・ 人事、仕事の精選、学校経営、資質向上について抜本的に見直す。
- ・ 今回の有識者会議は形式的な通達で済ませない。

4 大川小を置き去りにする状況

学校の防災を考えたとき、大川小のことを考えないわけにはいかない。しかし、石巻の学校現場では大川小学校の話題が避けられてきた。教育関係者は全員が事故についての正しい認識を持つべきである。

■大川小のことがタブー視され、目を背けてしまう状況になっていて、正しく認識されていない。

検証はもちろん、連日全国からたくさんの方が訪れているにもかかわらず、震災遺構についての議論も大川小抜きで進められている。

大川小のことがタブー視され、目を背けてしまう事態にすべきではない。みんなで向き合える状況を作りたい。

■残された遺族、子ども達の思いを受けとめる体制ができていない。

市教委の不誠実な聞き取り調査により、せっかく証言した子ども達が深く傷つくなど、同級生やきょうだいを一瞬にして失った子ども達への配慮が欠けている。

あの日まであの学び舎で楽しく学び、遊んでいた子ども達がいたことをしっかり見つめていきたい。遺族、学校、文科省、マスコミ、その他の人たちみんなで、力を合わせたい。その上で、大川で生まれ、大川小に通ったことを誇りに思える未来をめざしたい。

本質を避けない、タブー視しない。

- ・ 事実に向き合うことをサポートする（被害者も、学校も）
- ・ 大川で生まれ、大川小に通ったことを誇りに思える未来をめざす。

どうか子どもの命が無駄にならない方向をお導きください。よろしくお願いいたします。